◎いままでの月例会

鴨川シーワールド動物友の会は、発足以来1年2ヶ月の間に下記の様な月例会を行いました。

48年8月　シャチについて

9月　海ガメについて
映画「生きている海岸線」

10月　アシカの飼育について
スライド「ラプラタカワイルカ調査」

11月　サケ、マス類の飼育について
映画「シャチと遊ぼう」

12月　ジャンボ君とのモチつき大会

49年1月　カワイルカについて
映画「イルカは海の優等生」

2月　ペンギンの飼育について
映画「パンダ」

3月　磯の生物観察会

4月　動物の正しい名前
イソギンチャクのお話し

5月　水中のイルカ訓練と水上のイルカ訓練について

6月　オタリアの飼育について
映画「海を拓く」

7月　夏休みの動物観察と標本作成の話し

8月　スキンダイビングの指導

月例会も回を重ねるごとに、出席者も多く現在では60名位の出席を致しており、会員の皆さんは毎月の月例会を楽しみにしているようです。

尚、入会御希望の方は、事務局までお問合せ下さい。

鴨川市東町1464－18
鴨川シーワールド動物友の会事務局

コンクール開催について

動物の作文、詩コンクール

青少年に動物のことをよく知って頂き、併せて生命あるものを愛護するあたたかい心が養われる事を願い、　鴨川シーワールド動物友の会を設立し、以来各種行事を実施いたして参りました。このたび県下小中学校の児童、生徒を対象に動物の作文、詩コンクールを企画いたしました。この動物友の会が主催します「動物の作文、詩コンクール」は単に作文や詩を作るという言語教育的効果をあげるだけでなく、児童生徒に対して動物を通じて自然科学への関心を高めるとともに、動物愛護精神の普及や人間としての心情を豊かにする等、他のコンクールに見られない大きな効果を上げるものと思います。コンクールは下記要項で実施いたしたいと考えます。奮って御参加下さい。

応募要項

1．内容　皆さんが飼われている動物や廻りに居る野性動物などの愛くるしい出来事などを、作文や詩にしたものを400字づめ原稿用紙3枚以内にまとめたもの(創作年月日、氏名、年令、学校名、学年を明記して下さい)。

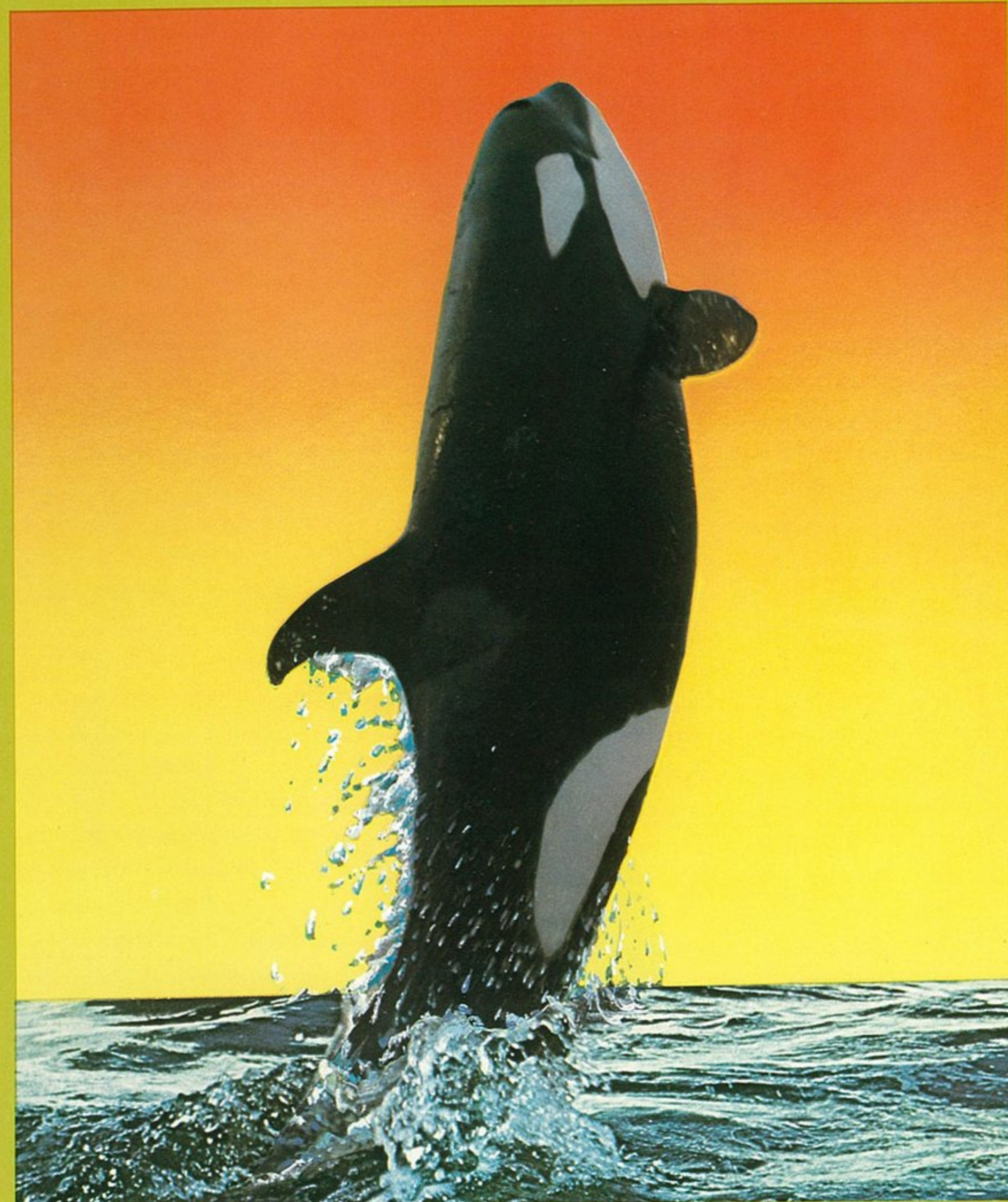
2．募集期間　昭和50年1月15日迄に創作した作品をお送り下さい。

3．送り先　〒296 鴨川市東1464－18
鴨川シーワールド動物友の会事務局宛

4．審査方法　学年別に審査し、金賞、銀賞、銅賞、佳作を選考致します。尚参加者には参加賞を差し上げます。

5．発表年月日と方法　入賞作品集を作成し発刊いたし、表彰式を行ないます。

さかまた

生物の豆辞典　No. 6

◎日本に於けるシャチの飼育

鴨川に水族館を建る時、アメリカで何度もシャチを見て来た館長やスタッフは、シャチを飼育する計画を立てました。それ以来、アメリカの水族館にもシャチの捕獲を依頼する傍ら日本でのシャチ捕獲を計画し、シャチを探し続けていました。折も折1970年５月に東京湾にシャチの群れがいかにも訪問してくれたかのように迷いこんできたのです。スタッフ全員は千載一遇のチャンスとばかり大船団を組んで約10日間追いかけ廻しましたが、天敵のいないシャチは、さすがに素早く追い詰められると船の下を潜りぬけて逃げてしまい、とうとう捉まえる事ができませんでした。

しかし1970年８月になり、アメリカからシアトル沖でシャチを捉まえたとの吉報が入り、直ちに会社の代表2名がシアトルに飛び、面接をしてその中から長い輸送に耐えられ、飼育に適すると思われる若い２頭の雌雄のシャチを選びました。この２頭は1970年９月４日シアトルから、貨物専用のジェット機で日本に運ばれて来ました。シャチは肺で呼吸する哺乳動物ですから、水中から揚げても呼吸はできますが、肌を乾かすと人間の火傷の様になってしまいます。また体重が大変重いので水の外では自分の重さで内臓を圧迫して病気をおこしたりします。そこで体重がかからない様に、大きな鉄のパイプで作った枠の中に丈夫なタンカを吊るし、シャチをこのタンカに乗せ体が乾かない様に上からシャワーで常に水をかけながら運んできました。羽田へ着いた２頭のシャチは大型トラックで鴨川まで前代未聞のパトロールカーの先導によりノンストップでシーワールドのプールへ到着しました。無事到着したとはいえシャチの飼育は初めてな飼育係の人達はおっかなびっくりシャチとの付合いを始めましたが好奇心の旺盛なシャチはすぐに飼育の人達と仲良くなり、餌をせがむ様になりました。

２頭のシャチは、その後大きな雄は「ジャンボ」、小さな雌には「オチャッピー」からもじり「チャッピー」と名付けられました。さあ日本で初めてのシャチの飼育が始まりました。最初の内はアメリカに居た時喰べていた好物のニシンを与えていましたが日本ではニシンは高価でしかも入手が難しい為、暫くしてサバを与えるようにしました。しかしサバでも大変おいしそうに喰べてくれましたのでホット安心したわけです。お陰で３年たった今日ではジャンボとチャッピーは日本にきてから１ｍ以上も大きく成長し、ジャンボは体重1800kgになり一日にサバを約50kgもペロリと平らげていますが、振り返ってみますとこの３年間に色々な病気にもかかり、いつも健康管理に頭を痛めさせてくれています。狭いプールの中は海とは環境が全々違いますので、すぐに風邪をひいたりおなかをこわしたり、イライラして怒りっぽくなったりします、そうすると餌を食べなくなったり、芸をしなくなったりします。そういう時はすぐにプールの水をぬいてシャチの体温を測ったり、血液の検査を行いどこが悪いのか、何の病気なのかを調べます。そして病気がわかると人間が病気の時と同じ様に抗生物質やビタミン剤の注射をしたり、餌の魚の中に薬をつめて一緒に与えたりして、病気を治してあげます。シャチが病気の時には飼育係の人達は不眠不休でシャチの看護にあたるのです。この様に一生懸命飼育を続けている間には色々なエピソードがありました。シャチは自分より体の大きな鯨まで襲って食べてしまう程の暴れん坊です。係員が水の中に落ちたら襲われるかもしれないと、皆思っていました。係員を背中の上に乗せてプールを回る「シャチ乗り訓練」を行っていた時のことです、丁度プールの中央位の所で係員がバランスを失って水の中に落ちてしまったのです。プールサイドで見ていた係員達は慌てましたが落ちたのがプールの中央なので手をのばして助ける訳にもいきませんし、水の中には、シャチがいますし、飛び込む訳にもいきません。もっと慌てたのは落ちた係員の方です。逃げなくては手か足をガブリとかみつかれるのではないかと思いました。泳いで逃げる暇もなくシャチは反転して落ちた係員の方へ泳いで来たのです。もうダメかと皆思ったその瞬間シャチは落ちた係員の足の下に潜りこみ背中に乗せて訓練の時と同じ様にプールサイドまで運んできたのです。この様に獰猛だと云われているシャチも訓練している内に大変利巧でユーモラスなおとなしい動物だと云う事がわかりました。また２頭のシャチが大きくなったので、雌のシャチを今まで居たシャチプールよりも大きいプールへ移動する事にしました。そのプールの中ではバンドウイルカを飼育しています。もし、シャチをバンドウイルカと一緒にしたら、イルカを食べてしまうかもしれないと係員は皆大変不安に思って実行をためらっていました。しかしアメリカで、カマイルカとシャチを同じプールの中で飼育した前例がありましたので、思いきって移動してみる事にしました。シャチを入れたとたんに、イルカ達は逃げてしまいましたがそれよりもっと驚いてしまったのは当のシャチの方でした。イルカ達がはねまわるプールの中で、ウロウロ、キョロキョロ泳ぎ廻り、係員の方にさえ寄って来ないのです。餌を投げてやってもオドオドして全然食べようともしないのです。イルカを襲うどころかオドオドするシャチを見て、今度は反対にイルカ達はシャチの回りを泳いだり皆で突っついたりしているのです。係員はあれが海の暴れん坊のシャチなのかと驚いたり呆れたりしました。シャチにもこんなに気の小さいところがあるのだと気がついた一つのエピソードです。こうしてシャチを飼い日本の子供達へシャチを見せると云う夢は実現したのですが、外国からでなく、日本で捕まえたシャチを飼う事も別に計画していました。1973年８月28日に網走にあるオホーツク水族館に漁船からシャチを生捕りにしたので飼育してほしいと連絡が有りましたが、オホーツク水族館にはシャチを入れる大きな水槽がないのですぐにシーワールドへ連絡をしてくれた訳です。翌日港に見に行くと捕鯨砲によって撃ち抜かれた穴が背ビレの下に開いていてそこにロープを通されて岸壁につながれていました。早速トラックで輸送する事になり44時間をかけてシーワールドに到着し早速名前を０号とつけました。シーワールドでは愛称を付ける前に番号を付けて飼育を始めます。日本で初めて捕まったシャチなので０号としたのです。この０号は15日間生存しましたが背ビレの傷が悪化して死亡しました。しかしこれにこりず、これからも日本で捉まえたシャチを飼育しようとマグロ巻網を使っての大捕獲作戦を現在でも計画しています。私達はアジアでは日本でしか飼育されていないこのシャチを大切に愛くしんで飼育していきたいと心から願っています。

（藤岡記）

網走から輸送されて来たシャチ

シーワールドのプールに到着したシャチ

◎トピックス

ウミタナゴの仔供が生まれました。

魚には卵から生まれる卵生魚と親と同じような型で生まれる卵胎生魚の2つに分けられます。一般に卵生の魚は卵の数が多く、タラなどは一度に 500万粒もの卵を生みますがこの内親にまで育つものは5匹ほどです。これに比べ、卵胎生魚のウミタナゴの子供は5～7cmになるまで母親の体内（輪卵管の中）で成長し5～6月に20～30匹ほど生まれます。タラなどに比べ数は少なくても、成長しているので外敵に襲われる事も少く、充分に子孫を残せます。また、母親の体内では交互に入っているため、生まれかたも、頭から生まれるもの、尾鰭から生まれるものと交互に出てきます。(普通、人間は頭からイルカは尾鰭から生まれます。

写真は昨年の夏から展示しているウミタナゴが次々と仔供を生み元気に成長している所です。

口が大変小さいため小さなエビ類（プランクトン）を食べさせています。秋には10cmほどに成長し、来年の出産準備にとりかかることでしょう。今、水槽の中では、おなかの小さくなった親と一緒に仔供が仲よく泳いでいます。

（水嶋記）

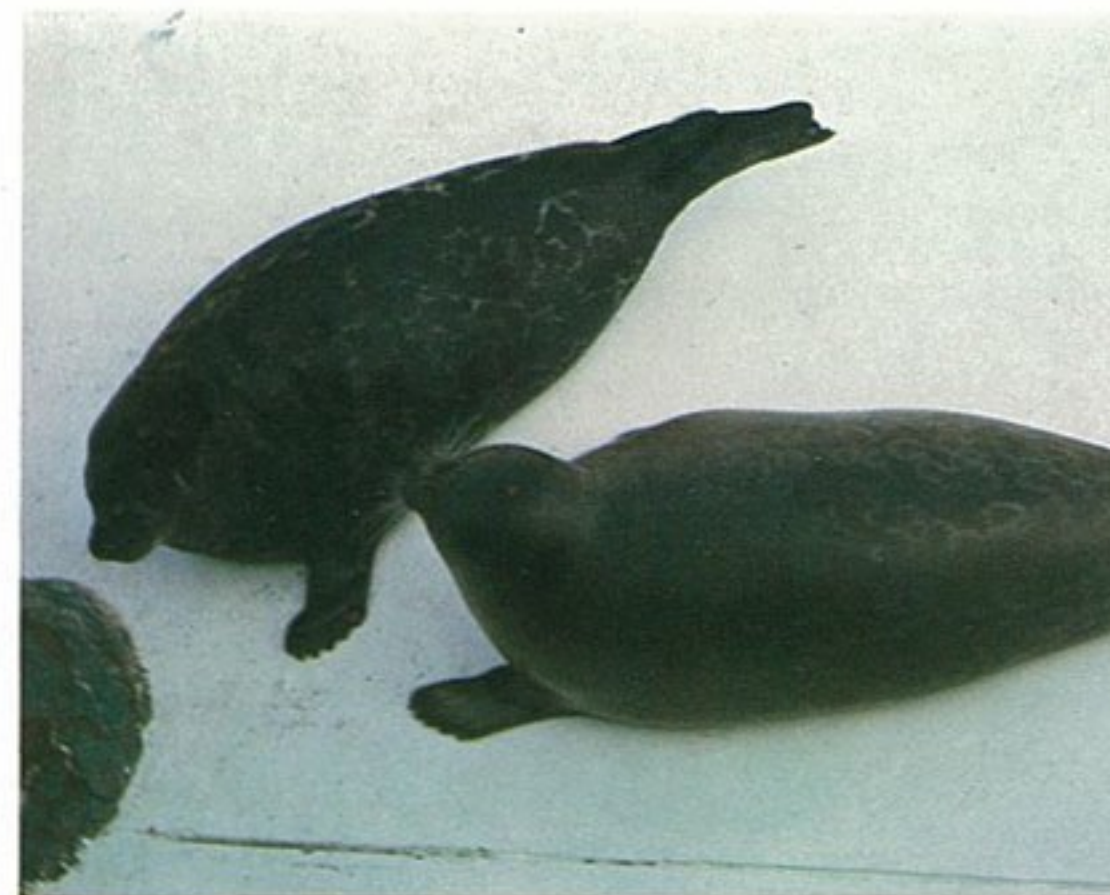
ウミタナゴの親と仔

◎シーワールドのアニマル達

ワモンアザラシ

当館で飼育中のアザラシの中で、最も小さく可愛いらしい為、よくお客様方に、他のアザラシの仔ではないかと間違えられるのがワモンアザラシです。体表の毛は粗く、暗褐色の斑点、白色のリングがあることより、フイリ（斑入）アザラシの異名があります。外見上体色模様等がゴマフアザラシと大変似ていますが、顔付きや前肢の爪を立て床を蹴るようにすすむ歩き方等、よく観察すると相違点があることが判ります。現在飼育中の二頭は、昨年五月に当館に来て、今では体重がその当時の約倍近い30kgに成長し、推定年令は三～四才です。二頭の性格は対照的で、一頭はのんびり屋で他は大変神経質ですが、共通点は左右の眼の大きさが異ることで、他のアザラシに比較し小さい眼が一層小さく見えます。

本種の飼育は、北海道での飼育例はありますが、それ以外の地域での飼育例は少なく、現在では当館が北端になっており、その意味でも貴重で珍しい動物だと思います。

（大島記）

ワモンアザラシ

◎動物友の会のお知らせ

鴨川シーワールド動物友の会では、毎月々末の土曜日に、月例会を開催しております。館内の動物を材料とし、その生態の観察や飼育方法の指導、及び動物に関する映画、スライドを上映し、動物達への関心を高めてもらうよう努めておりますが、年に数回は野外での観察会も行っております。前回は磯の生物の観察会を、去る3月28日に行い、多数の会員の皆様に大変喜ばれました。その模様を、お知らせしますと、場所は鴨川シーワールドから国道128号線を東に約10km行った、東京水産大学臨海実験場の、全国でも数少ない磯の生物が保護されている前の磯が選ばれました。この場所は、生物が豊富ですが、保護されている為許可なしでは立入ることが出来ませんので、海の生物を研究するため、場長さんに特別の許可をいただき、マイクロバスに分乗し、午後1時にシーワールドを出発しました。参加人員56名は磯につくと、カニ、エビ、等の甲かく類、ウニ、ヒトデ、等の、きょく皮類、魚類、そして貝類の4班に分かれ、各々専門の水族館の先生がつき班別に行動開始しました。海のそばの子供達でも、名前の知らない、生物や珍しい生物がたくさんいて「この貝は何んとゆう名前ですか？」。「夜はどこにいるのですか？」、「エサは何を喰べているのですか？」等、次々と先生方に活撥な質問がとび2時間の予定時間を1時間もオーバーして無事終了しました。約3時間の楽しい野外観察会は会員一同に大変好評をいただき、シーワールドの先生達も、その勉強ぶりにおどろかされましたので、ぜひ早い機会に次回の野外観察会を行う様計画するつもりでおります。

楽しい磯採集

磯採集に参加した仲間

表紙説明　（背　ビ　レ）

イルカの背ビレは、お魚の背ビレと違って体の真中に飛行機の尾翼のように立ち上っています。この背ビレの役目は、飛行機の尾翼と同じように、水中を速く泳ぐ時に、体が横にゆれないようにする為だといわれています。しかし、イルカの種類によっては、背ビレの無いものもあることから、どうも、横ゆれ防止以外の役目をもっているようで、今のところ、はっきり判っておりません。

シャチの背ビレは、成長すると、特に雄では高く尖り、他のイルカ類よりも大きくなります。この形が、丁度、昔の武器である戟を逆さにしたのと似ているところから、正式名「サカマタ」の名前が発祥したといわれています。

（鳥羽山）